

霊巖洞

霊巖洞は、伝説の剣豪・宮本武蔵（1584-1645）が晩年の2年を過ごした場所として有名です。南北朝時代（1336-1392）に禅を日本に初めて伝えた中国の僧・東陵永瑀が創建した禅寺・雲巖禅寺の境内に位置しています。

約50年前に建てられた現在の社殿の隣には泉があり、苔むした石の上から水が湧き出ています。参拝客は武蔵と同じ水源から飲むことができます。

明治時代の破壊行為

洞窟への道中には苔むした丘の斜面があり、座っている石像が点在していますが、その多くは首がありません。これらは、仏陀の弟子である500人の羅漢であり、しばしば困惑した表情や滑稽な表情で描かれています。石像は、地元の商人である淵田屋儀平が寺に提供したものです。18世紀初頭、儀平が佐賀で24年の歳月をかけて彫らせました（武蔵が住んでいた頃には存在していませんでした）。これらの石像は、政府が明治（1868-1912）初期、仏教が外国からの輸入品であり、日本固有の神道よりも必然的に劣っていると非難したため、破壊されてしまいました。

武蔵の死

武蔵は熊本に引っ越してきた時点ですでに50代後半であり、人生の終わりが近づいていることを知っていました。武蔵はここで、剣術と人生の実践的な指針となる『五輪書』を執筆しました。武蔵が禅寺に隠居することに違和感はありませんでした。「剣と禅は一如である」。彼は、剣術と禅を、剣禅一如という言葉に表されているように、真の自己を見出すことにつながる相補的な修練であると考えていたのです。武蔵は洞窟の中の大きな岩の上に座って瞑想したと言われています。当時は洞窟の前の山腹には木が少なかったので、西にある海まで見渡せたことでしょう。